

## 静岡市域に伝わる富士参詣の習俗と法器草(オニバス)

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 大高 康正〉

富士山の祭神である「<sup>あさまのおおかみ</sup>浅間大神」を祀る浅間神社は、鎮火の祈りを捧げるために設置されたものとされています。富士宮市宮町の富士山本宮浅間大社は駿河国の一宮として崇められ、浅間神社の総本宮とされていますが、静岡市葵区宮ヶ崎町の静岡浅間神社は、この富士山の祭神を当時の国府のあった駿府に分祀したものです。本宮に対してこちらは新宮と呼ばれることもあり、分祀の時期は社伝では延喜元年(901)とされています。

静岡浅間神社は、境内に鎮座する<sup>かんべ</sup>神部神社・<sup>あさま</sup>浅間神社・<sup>おおとしみおや</sup>大歳御祖神社とその摂社、末社の総称となります。江戸時代以前には、神部神社を惣社、浅間神社を新宮と呼び、総称として駿河府中浅間社とか府中惣社浅間社などと呼ばれていました。大歳御祖神社は、古代の安倍の市の守護神とされており、かつては<sup>なごやしや</sup>奈古屋社と呼ばれていました。この奈古屋社の社人であった<sup>さかき</sup>榎<sup>たゆう</sup>大夫は、今川氏より永禄三年(1560)以前より、駿河国内の富士山への参詣者に<sup>けさえんざ</sup>袷裯・<sup>おんみょうじ</sup>円座・<sup>おんみょうじ</sup>木綿を販売する権限をも与えられていたようです。但し、近年その権利を山伏(やまぶし)や陰陽師<sup>おんみょうじ</sup>によって<sup>おうりょう</sup>押領されていたことから、この年に改めて保障されています。また榎大夫は、永禄11年(1568)にも今川氏より江尻(清水区江尻)・清見寺(清水区興津清見寺町)・蒲原船関(清水区蒲原付近か)ほか諸役所を通過する際の関銭を7人分免除されています。ここから、駿府より西側の地域から富士山をめざしてやってくる参詣者が静岡浅間神社へ参詣していること、その参詣者に対して社人の榎大夫が袷裯・円座・木綿といった参詣装束を一式提供していた様子がわかります。関銭の免除は、榎大夫自らが<sup>せんたつ</sup>先達となつて、参詣者を富士山へと直接案内していたことを示すものです。こうした権限は、以降も<sup>なごやたゆう</sup>奈吾屋大夫、<sup>どだゆう</sup>土大夫、<sup>おおいきゆうま</sup>大井求馬、<sup>おおいもんのしょう</sup>大井主水正といった奈古屋社に関わる社人に対して、江戸時代初期までは引き継がれていたことを確認できます。

江戸時代の地誌(『駿河記』、『駿河国新風土記』など)には、庵原郡鳥坂(静岡市清水区)の<sup>みよりゆうじ</sup>妙立寺境内の大日堂に二尺余の「銅面鉄身の大日如来」の古像があり、近江商人がこの像を富士山大日嶽に奉納しようと背負ってきましたが、この場所に来たとたん<sup>おおいもんのしょう</sup>に重さが数千斤を背負うくらいになってしまったので境内に大日堂を建てここに祀った、という寺伝を記しています。



妙立寺大日堂

妙立寺の大日如来像については、当センターの富士山巡礼路調査の中で現在調査を行っておりますが、銅面鉄身の大日如来像となりますと、大頂寺(富士宮市東町)で保管されている富士山から下ろされたとされる中世後期から近世初期頃に製作された像も思い浮かびます。また、『甲斐国志』山川部にも「鉄身銅首」の大日如来坐像が富士山頂の初穂打場にあつて、その像には大永8年(1528)に尾州(愛知県)の野間弥三郎によって奉納されたとする銘があつたと記されています。中世後期にはこういった製作技法をもつ像が割と存在していたことと、駿府より西側の地域の富士山信仰では、大日如来像を奉納することに特別な意味を有していたことがうかがえます。噴火口(内院)に鎮座する富士山の中心となる仏は、神仏習合の考え方では大日如来としていた背景が影響していたのではないのでしょうか。

また、静岡市葵区赤松にある麻機遊水地<sup>あさばたゆうすいち</sup>では、明治時代以降記録が途絶えていた絶滅危惧種のオニバスが再び現れるなど貴重な生態系に触れることができますが、オニバスと富士参詣にも深い関係がありました。オニバスはスイレン科の一年生の水生植物で、夏にトゲだらけの日本一大きな葉を水面に広げます。麻機遊水地は、大雨時に巴川や浅畑川の水を貯める治水事業施設として整備されたものですが、この遊水地の場所は元々湿地帯となっており、かつては浅畑沼が広がっていました。浅畑沼には「沼のぼあさん」の昔話が伝わっています。祖母の病氣平癒のため浅間神社へ祈願に出かけた孫娘が途中浅畑沼で水神(カッパ)に水中へと引き込まれて行方不明になり、祖母はそれを嘆き沼へ身を投げたという悲しいお話です。



麻機遊水池のオニバス



オニバスの種(マス目は5mm)

江戸時代の地誌(『駿河記』、『駿河国新風土記』など)では、祖母は大蛇となって水神を退けた後、この沼から「一千人の食を出して、諸人の飢を助べし」と誓いを立てると、その翌年には法器草<sup>ほうきぐさ</sup>という植物が生い茂り、実と根は食料になったとあります。この法器草は鬼蓮ともいい、この実を糸を通し、富士山への参詣者の数珠を作っていたという富士参詣の習俗を伝えていませぬ。法器草という名称も、数珠に利用していたことから付いたものと思われます。こうした習俗は現在残っていませんが、この数珠は参詣者の道中を守ってくれる特別な加護があつたと考えられていたのではないのでしょうか。

【参考文献】

・中村羊一郎編『静岡浅間神社の稚児舞と廿日会祭』(静岡新聞社、2017年)

【写真2・写真3提供】

・栗山由佳子氏